

身近な文化財調査 II

飯島町の猪垣・猪堀
調査報告書

平成9年11月

飯島町教育委員会

身近な文化財調査 II

飯島町の猪垣・猪堀 調査報告書

平成9年11月

飯島町教育委員会

飯島町の猪垣・猪堀

と周辺の文化財

写真1～6 七久保区

7～12 田切区

13～19 飯島区

20～21 猪とその被害

22～23 文化財めぐり



写真2 小池家と豊口家の間の道
道に沿って右側に猪垣があつた。昔はこ
の道は堀のようだ。この先に木戸があつ
たといふ。



写真3 豊口家の納屋
猪の見張り小屋だった。



写真4 神社の旗竿を立てた石
かつて猪垣付近に社があった。



写真6 長助林猪垣
中央道側から北西方向を見る。



写真5 祝殿（右）と延命不動尊（左）



写真7 山麓の遠景
白線は標の駒の駒猪垣のおよその位置

写真10 2号塀
「中」の墓地付近。



写真11 2号塀
墓地からさらに南へ。



写真14 山の田猪塀



写真15 電気牧柵
現在は触ると電流が流れる柵で守っている。



写真8 猪塀への道
唐沢界氏宅南の道を山に向かう。印の裏



写真9 文化財標柱付近
白線は2号塀の伸びる方向。



写真12 聖徳寺猪塀
寺の北側の石積み。塀の部分は昔から道になっていた。



写真13 猪塀に向かう
いる。猪塀が守った水田が今は荒れ地になっ



写真18 上山嘉雄氏の小屋
道の東(右)の小屋辺りを、かつて猪塀
と土手が通っていた。



写真19 上山一族の社
王崎様。昔は社務所もあった。



写真22 「第6回文化財めぐり」
平成9年11月3日、猪垣の見学会を開催。



写真23 猪が又々をかいた跡
見。曾利山の田。文化財めぐりの最中に発
見。



写真16 十二小ボツ田
かつて一枚の田がごく小さな十二段の棚
田があった。



写真17 岩間上山猪塀
林の中に跡が残る。



写真20 猪



写真21 平成6年、岩間淹ヶ原地籍。上山嘉雄氏
猪が荒らした水田



発刊にあたって

飯島町では、文化財調査委員会を中心に町内の文化財の調査を進めてきましたが、平成8年度からは、一般住民の方々からも参加を得て「身近な文化財調査」を始めました。

第1回目の昨年度は、今では忘れられようとしている日曾利地区の「善光寺道」を調査対象としました。地元の古老や知識者にご案内をいただきながら、駒ヶ根市吉瀬地区から飯島町日曾利地区に至り、中川村飯沼地区までを実際に歩いて道筋を調査し、その周辺の文化財をまとめ、報告書を作成することができました。

今回は、第2回目の身近な文化財調査として、町内に残る「猪垣」「猪堀」を調べてみることにしました。猪垣・猪堀というのは、農作物を荒らす猪対策として、先人が築いた石垣・土手・堀などのことです。山麓に暮らしてきた人々が獣害から作物を守ろうとした生活の知恵であり、重機のない時代にそれを築いた人々の努力の跡を垣間見ることができます。

今回の調査では、過去の調査を補うだけでなく、広く町民に呼びかけたことによって、今まで一部の地元の方しか知らないかった猪垣・猪堀についても記録することができました。また、今だからまだ聞くことができた話、これから年を経るごとに消えていくと思われる、そんな昔話を聞けたことも大きな収穫でした。

この報告書が広く利用され、歴史に親しみ、文化財に対する理解と認識を深める一助となれば幸いです。

調査にあたっては、貴重なお話を聞かせてくださった地元の方々、また、身近な文化財「猪垣」「猪堀」に関心を寄せ、調査に参加してくださった方々など、多くの皆様にご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

例　　言

- 1 本調査報告書は、身近な文化財調査の第2集である。
- 2 今回調査対象とした「ししがき・しぶおり」は、猪や鹿から田畠などを守るために築かれた構築物で、漢字では「猪垣・猪堀」「鹿垣・鹿堀」「猪鹿垣・猪鹿堀」などと表記される。当地域では鹿よりも猪の害がひどかったことから、本報告書では「猪垣・猪堀」と統一して記すようにした。
- 3 本報告書は、短期間に編集したため不十分点が多い。今後も継続した調査が必要である。

目 次

発刊にあたって	1
例 言	1
第1章 調査の概要	3
1 調査に至る経緯	3
2 調査組織	3
3 調査の経過と分担	3
4 調査の方法	4
第2章 猪による害とその防御	6
1 猪の習性とその被害	6
2 猪害の防御	6
(1) 猪を防ぐ	7
(2) 猪を捕る	8
(3) 信仰と行事	8
(4) 現在の獣害対策	8
第3章 飯島町の猪垣・猪堀	10
1 七久保区の猪垣	10
(1) 上通り遠見石の猪垣	10
(2) 高遠原長助林の猪垣	17
(3) その他の関係事項	20
2 田切区の猪垣・猪堀	20
(1) 春日平櫛の脇の猪垣	20
(2) 聖徳寺の猪垣	24
(3) その他の関係事項	24
3 飯島区の猪垣	27
(1) 日曾利山の田の猪垣	27
(2) 岩間上山の猪垣	31
4 町内の猪垣・猪堀の特性	33
<付 記>古文書から見た江戸時代の獣師鉄砲	35
<参考文献>	41

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯

飯島町では、平成8年度から、文化財保護事業の一つとして「身近な文化財調査」を実施している。これは、町民の文化財に対する認識が高まる中で、文化財としてとらえるものを、従来から言っていた「古い」「貴重」「希少」なものから、私たちの身の回りにあって生活に関わりの深かったものにまで広げ、一人一人がより一層文化財を身近に感じ、理解し、活用していきたいと考えたからである。

平成9年度は、第2回めの身近な文化財調査として、猪や鹿から農作物を守るために先人が築いた「猪垣」「猪堀」を対象にした。

町内に残る猪垣・猪堀の遺構の中には、以前に調査が行われたものもある。しかし、その後年月が経過する中で遺構の状態が変わっている可能性もあり、現状を再確認する必要が感じられるようになってきた。一方、これまで猪垣があったといふことが語られるだけで、その正確な場所さえ知られていないものもあり、地域の伝承者が少なくなる中で、調査の必要に迫られてきた。そこで、町内に跡をとどめる猪垣・猪堀について、その歴史背景や周囲の文化財も含めたかたちで調査をおこなうことになった。

2 調査組織

(1) 調査員

<文化財調査委員>

桃沢匡行 川村正彦 中村庄司 小林弘一 清水幹男 中島淑雄
三石繁 松村澄人

<一般>

円山史 代田雅一 小川しげ子 箕浦ヒロ 大沢千恵子

(2) 案内・協力者

柴芝春夫 豊口善弘 米沢一 唐澤昇 唐澤茂男 上山宗吾
上山嘉雄

(3) 事務局

片桐教育長 箕浦社会教育課長 堀越文化係長 丸山学芸員

3 調査の経過と分担

(1) 調査の経過

平成9年8月4日 文化財調査委員会で、身近な文化財調査計画を決定

8月20日～9月5日 一般調査員を募集

9月18日 調査打ち合わせ会を開催し、班編成・調査日程を決定

9月30日 七久保区上通り遠見石班、現地調査

10月6日 飯島区日曾利山の田班、現地調査
 10月8日 田切区春日平櫛の脇班、現地調査
 10月21日 各班の調査結果まとめ、報告書編集のための打ち合わせ
 10月22日 町民からの情報提供により、急きょ飯島区岩間上山地籍を事務局で現地調査
 10月22日～11月2日 調査報告書の編集
 11月3日午前 調査報告会
 午後 調査結果をもとに、町民を対象に第6回文化財めぐりを開催

(2) 調査班編成(◎班長)

班	調査員	案内
七久保区上通り遠見石班	◎清水幹男・松村澄人・代田雅一・大沢千恵子	柴芝春夫・豊口善弘
田切区春日平櫛の脇班	◎川村正彦・桃沢匡行・中村庄司・小林弘一	唐澤昇・唐澤茂男
飯島区日曾利山の田班	◎中島淑雄・三石繁・円山史・小川しげ子・箕浦ヒロ	米沢一
映像班(ビデオ記録)	三石繁	
報告書まとめ	桃沢匡行・川村正彦・中島淑雄・松村澄人・事務局	

4 調査の方法

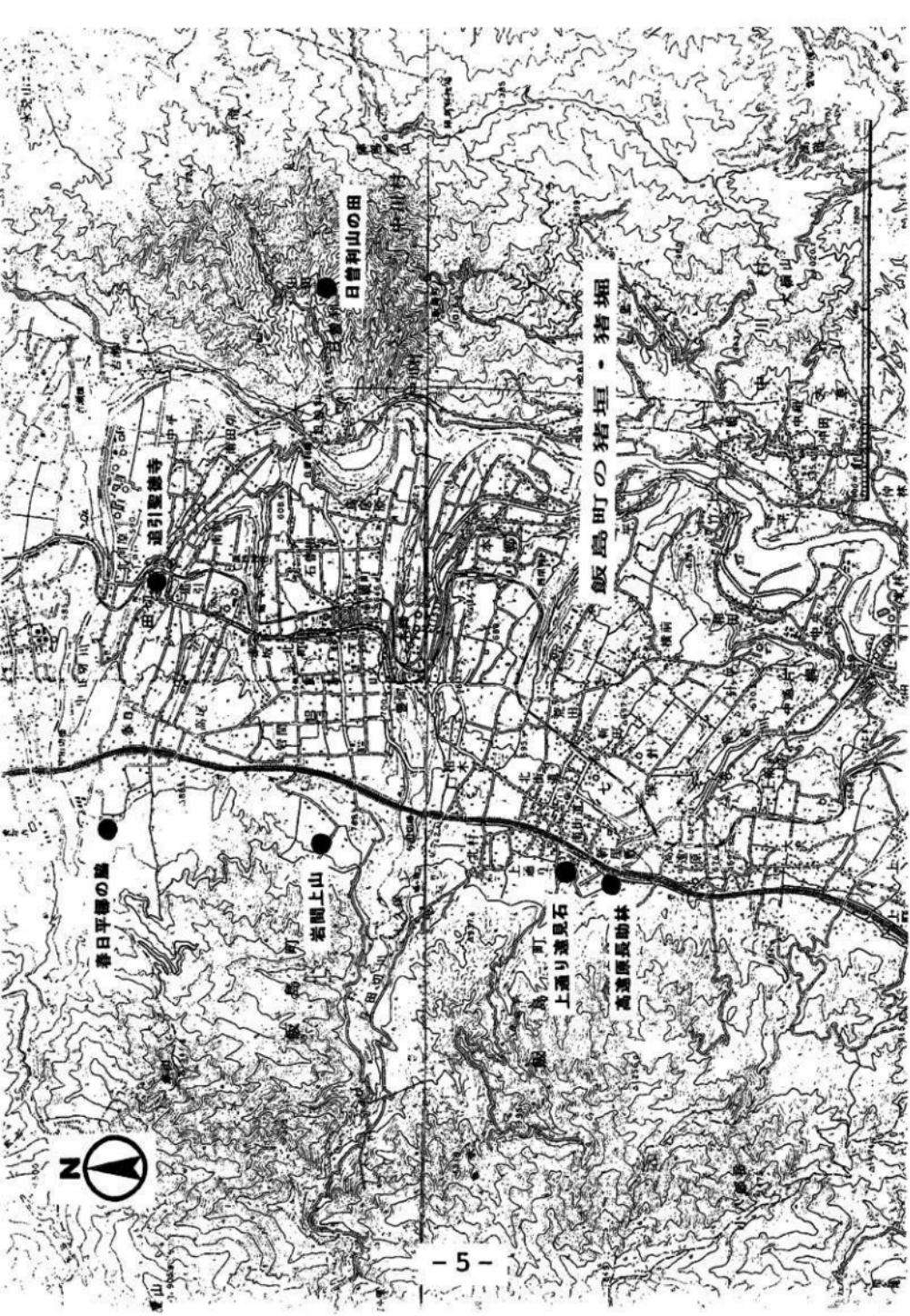
今まで痕跡が残っていることが知られていた飯島町内3か所、「七久保区上通り遠見石」「田切区春日平櫛の脇」「飯島区日曾利山の田」の猪垣・猪塀について、調査班を編成し、現地の状況に詳しい方に案内を依頼して調査をおこなった。

班ごとに日程を決めて現地調査をおこない、歴史・民俗に関する聞き取り調査、遺構の位置の確認、長さ・幅・高さ・深さの測定などをおこなった。あわせて写真で記録を残すようにしたが、別に、映像班によるビデオ撮影もおこなった。

また、各班ごとに文献も調査した。当該の猪垣・猪塀に直接言及した文献だけでなく、猪による被害とその対策に關係したことがらについて、広く探ってみるようにした。

調査の過程で、七久保区では「高遠原長助林」の猪垣が新たに見つかり、また田切区では「聖徳寺」にも猪垣があることが指摘され、それぞれ遠見石班・櫛の脇班が現地調査をおこなった。

なお、これらの猪垣・猪塀の現地調査が終わった後、町民からの情報提供によつてもう1か所「飯島区岩間上山」に猪塀の跡が残っていることが判明し、急きょ事務局で確認調査をおこなった。



第2章 猪による害とその防御

1 猪の習性とその被害

農作物を荒らす動物のなかで、よく人々を困らせたのは猪と鹿だった。「猪」と「鹿」はそれぞれ1字でも「しし」と読み、一括して「猪鹿」と書いても「しし」と読んだ。古文書では、「しづがき」は「猪鹿垣」と記されていることが多い。西暦1600年ごろの日本語の意味が分かる『日葡辞書』で「シシガリ」を引くと、「鹿や猪を捕る狩り」とある。

この猪と鹿では、特に被害がひどかったのは、猪のほうだった。鹿も畑に出て作物を食い荒らすことがあったが、猪のほうは、一度襲われたら畑が全滅に近い被害を受けることもあった。そこで、ここでは猪を中心に述べることにする。

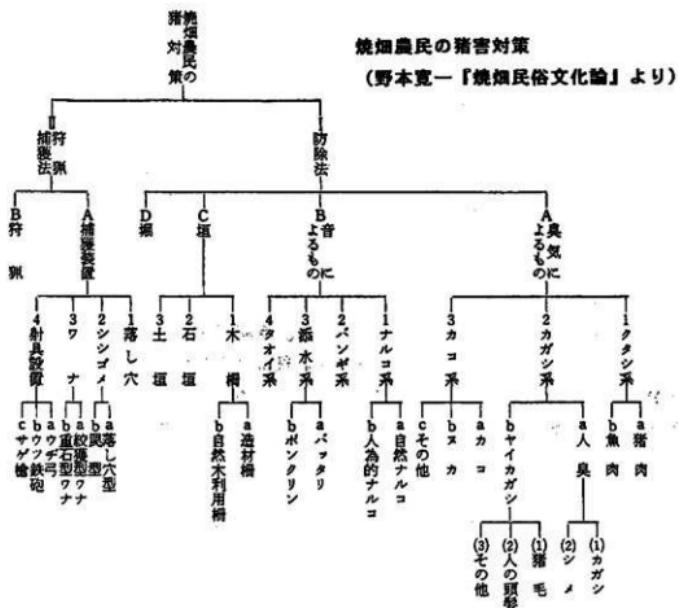
猪は、山野に住む大型哺乳類で、体長は1メートル～1.2メートルほどになる（写真20）。豚の原種で、体が太く、鼻が突き出している。毛色は黒褐色で、成体は犬歯が牙になっている。子には背に白い縦線があるので「うりぼう（瓜坊）」「うりんぼ」などと呼ばれる。東日本では積雪と流行病のために近代以降には生息数が激減したという。

元来は低山帯に生息する植物食の動物ということだが、およそ食べられそうなものはないでも食べる。山での好物は楮の実・ぶなの実・栗・ぶどうなどで、ほかにもゆりの根・わらびの根などを鼻先で掘って食べる。春には竹の子も掘って食べる。湿地で沢がにを食べたり、畑でみみずを掘ったりもする。畑の作物では、稻・馬鈴薯・甘藷・大豆・小豆・南瓜などが大好物で、蕎麦・粟・稗なども食べる。このような作物を自當てに、収穫の時期になると山からおりてきて、田の中を軽げまわって稻を倒して食べたりする。夜行性なので、朝起きて畑に行ってみたら芋を掘っていた、ということになる。

このように猪は田畑を荒らす最大の害獸だった一方、屈指の食用獣として古くから狩猟されてきた。縄文時代には弓矢で捕らえたり、通路がほぼ決まっているため落とし穴や仕掛けわなで捕殺した。江戸時代には、領主に願い出て許可された狐師鉄砲も使った。現在でも、おもに山間の地域では猪肉を食べる習慣を受け継いでいるところが少なくない。

2 猪害の防御

猪による被害は、飯島町近辺に限ったことではなく、山に暮らす人々の共通の悩みだった。全国各地にさまざまな猪害対策があり、野本寛一氏はこれを次表のように焼畑に関する民俗文化研究の中で系統的にまとめている（参考文献12）。



また、物理的に効果が期待される方法だけでなく、山犬信仰のように神仏に頼ることもおこなわれた。

このようにさまざまな防護法があったが、伊那谷で聞かれるものについて、簡単に以下に記す。

(1) 猪を防ぐ

そめ（かがし） 布切れ・人の髪の毛・かんな屑などを棒の先にくくりつけ、田畠の周囲に立てる。

かこ 「そめ」やぼろ布などを一晩中焼いていぶらせ、いやなにおいで猪を追い払う。

添水（ぱったり） 流水を利用して、大きな音をたてておどす。

猪垣・猪堀 猪が田畠に侵入できないように、山側の土を掘り上げて土手を高く築き、その上へ乱杭を立てて垣を結う。また、石を積んで石堤をつくる。その構造から猪垣・猪堀・猪土手など、いろんな呼び方がされた。

猪小屋での猪追い 山付けの田畠にある猪小屋に泊まり込み、一晩中火を焚いたり大きな音や声を出して追い払う。

威し鉄砲 鉄砲に実弾を込めず、空砲で猪をおどす。江戸時代には、村ごとに許可された数しか所持できなかった。

(2) 猪を捕る

落とし穴 猪の通り道に落とし穴をつくり、飛び込んだ猪を輪で突いたり、棒でたたいたりして仕留める。

わな 猪の通り道に、猪が首を突っ込むと締まるわななどを仕掛ける。

猪打ち 鉄砲で猪を撃ち、捕らえる。或し鉄砲と同様に、江戸時代には所持が規制されていた。

(3) 信仰と行事

三峯信仰 三峯神社は埼玉県の奥秩父に鎮座する。眷属（従者、神様のお使い）は山犬といわれ、「お犬様のお札」は猪鹿よけや火災・盗難よけの効験があるといわれる。全国に三峯講があるが、長野県は特に多く、桜井徳太郎氏の昭和23年の調査（「府県別三峯講中分布表」）によると1410の講中があったという（参考文献12）。飯島町内にも三峯講があった。

なお、遠山谷では、静岡県水窪町の山住神社のお犬様を信仰している。

小正月の猪追い 上伊那地方には、小正月の行事に、「鳥追い」「もぐら追い」「虫追い」とともに「猪追い」をおこなうところが多い。猪追い棒を持った子供たちが、囁き唄を歌い、空き缶や古バケツなどの鳴り物をたたきながら歩いて回る。棒で地面をたたいて回るところもある。

囁き唄にはつぎのようなものがある（参考文献5）。

○ししやーい、鳥やーい、豆とりほっぽ、米とりほっぽ、道陸神の神様は、いじのむさい神様で、出雲の国へ呼ばれて、ほっぽ鳥の頭へばいとうすえて灸すえて、はとぼっぽ、はとぼっぽ、ししやーい、鳥やーい。（宮田村）

○ししやーい、鳥やーい、まめ食ってちょんちょん。（駒ヶ根市赤穂南割）

○しし追い、しし追い、しし追いだ。（駒ヶ根市赤穂北下平）

○米の鳥もぼっぽ、粟の鳥もぼっぽ、ぼっぽ鳥の鳥の頭には、えいとうすえて火をつけ、川中島へ追い流せ。（駒ヶ根市東伊那火山）

(4) 現在の獣害対策

猪などの野生動物による作物への被害対策は、現在でも変わらず農家の苦労の種になっている。近年は特に猿による被害が甚だしく、電気牧柵をはじめ新しい対策もおこなわれているが、かしこい猿には効果が長続きしないという。

現在の飯島町の鳥獣による被害とその主な対策は次表のようである。

平成 8 年度 新島町における農業による被害と対策

(資料提供：飯島町役場農業課)

加害鳥類	被害農林産物	被害量	被害額(万円)	被害発生時期	被害の具体例	現在おこなわれている対策
カラス	果樹(李・イチゴ)	15	4	760	収穫期 食害	絶縁による捕獲・誘導、おどし
ムクドリ	野菜(ナス・トマト)	5	2	200	収穫期 食害	絶縁による捕獲・誘導、おどし
ヒヨドリ	野菜(ナス・トマト)	5	0.5	90	収穫期 食害	絶縁による捕獲・誘導、おどし
ドバト	豆類(大豆)	3	0.5	80	収穫期 食害	
キジバト	豆類(大豆)	5	0.5	90	南芽期・収穫期 食害	
クマ	飼料作物(燕麦)	2	0.5	50	南芽期・収穫期 食害	
イノシシ	稻	1	0.3	72	はづ期・収穫期 食害	
サル	飼料作物(麦)	20	2	650	収穫期 食害	絶縁による捕獲・誘導、電気柵、ネット、忌避剤
シカ	稻	10	6	1950	生育期・収穫期 食害・踏み荒らし	絶縁による捕獲・誘導、電気柵、ネット、おどし
ハクビシン	野菜(ナス・トマト)	2	2	130	食害・踏み荒らし	
ハクビシン	野菜(ナス・トマト)	1	1	10	生育期 食害	
野菜(ナス・トマト)	2	2.5	462.5	収穫期 食害		
野菜(ナス・トマト)	15	10	600	年間 食害・踏み荒らし		
野菜(ナス・トマト)	2	1	32.5	食害・踏み荒らし		
野菜(ナス・トマト)	50	4	760	収穫期 食害・踏み荒らし		
野菜(ナス・トマト)	10	4	500	収穫期 食害・踏み荒らし		

第3章 飯島町の猪垣・猪塀

1 七久保区の猪垣

七久保区の猪垣の調査は、「上通り遠見石班」がおこなった。

遠見石の猪垣については、向山雅重氏による報告をはじめとして、飯島町の猪垣の中では最も豊富に記録されてきている。また、昭和51年3月、飯島町教育委員会は現地に文化財標柱を立てた。今回の調査は、このような過去の調査から20年を経ての試みだが、聞き取りを中心として、新たにわかったことが多い。

さらに、今回、高遠原耕地の字中河原、通称「長助林」にも猪垣があることが確認され、はじめて記録することができた。

（1）上通り遠見石の猪垣

【猪垣の位置と概観】

七久保区上通り遠見石地籍は、七久保区のうちでも西方の木曾山脈の麓に位置する。芝宮神社の西に当たり、すぐ南西を日向沢川が南東方向に流れる。200メートルほど東を中央道が走っている。

ここに残る猪垣は、代々この地籍に居住してきた小池家（当代：清氏）と豊口家（当代：善弘氏）が、それぞれ所有の畠を猪害から守るために築いた石積み様式の猪垣である。

猪は北西方面の山から日向沢川に沿っておりてきただので、猪垣はこれを防ぐようにつくられている。小池家の猪垣は、宅地と畠の北・西・南を囲うように伸びていて、その総延長は当時300メートルほどあったと思われる（現在痕跡が残っているのは98メートル=図2①②③④）。豊口家の猪垣は、主に宅地と畠の北西と西を囲っていて、宅地の南はとざされるが、その先にもわずかながら日向沢川に平行して存在し、総延長は当時100メートルほどあったと思われる（現在痕跡が残っているのは53メートル=図2⑤⑥）。

遠見石の猪垣の特徴的な点は石を積んで築かれていることだが、その材料となった石は近くに豊富にあった。豊口家北西（猪垣の外）の神社跡周辺には、現在も比較的大きな石が露出している。果樹園や畠から多くの石が出ていている。石の形は、かつてこの辺が日向沢川の河原であったことをうかがわせる。

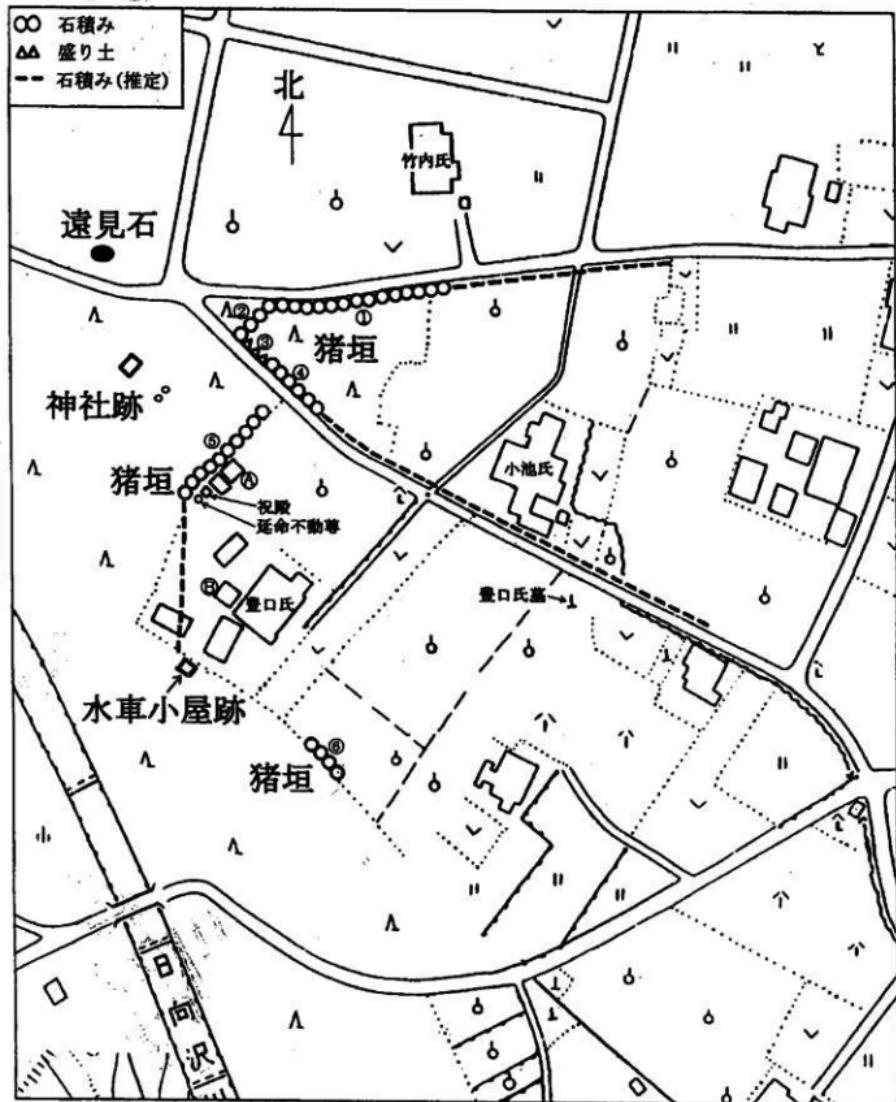
当時猪垣によって守られた畠は、現在では植林地（杉・檜）や果樹園（梨）に変わっている。現在は猪垣の外にも植林地や果樹園（リンゴ・梨）が広がっているが、当時は猪垣が畠と山林の境だった。

猪垣が当時に近い形で残っている部分は、わずかしかない（図2②、⑤の一部）。猪垣の痕跡はあるが石垣が崩れている部分（図2③④、⑥の一部）については、積まれた石の一部が、七久保の学校の体操場をつくるときに持っていかれたといわれる。小池家の猪垣で現存しない部分（図2①の東、④の南東）は、猪垣沿いに舗装道路ができたときに壊されたらしい。

図1：上通り遠見石・高速阪長助林猪垣地図



図2：上通り遠見石猪垣地図



表：土地所有者と植生／作物

年代	猪垣番号	土地所有者 所有家(屋号: 耕地: 当代)	土地の植生/作物	
			猪垣内側	猪垣外側
猪垣構築期	①②③④ ⑤⑥	小池家(推定) 豊口家(推定)	畑作物(推定)	山林(推定)
平成9年(1997)年調査日	①	小池家(なし: 上通り: 清司)	植林(杉、檜)	舗装道路
	②	小池家(なし: 上通り: 清司)と 桃沢家(上新井: 上通り: 佐富)の境界	植林(杉、檜)	植林
	③、④	小池家(なし: 上通り: 清司)	植林(杉、檜)	舗装道路
	⑤	豊口家(遠見石: 上通り: 善弘)	宅地	植林
	⑥	豊口家(遠見石: 上通り: 善弘)	果樹園	旧小径、竹林、水路

猪垣①～④の内側の小池氏所有地は、大正期までは桑畠、豊口家の果樹園も桑畠であった。

表：猪垣の長さと様子

猪垣番号	長さ	様子
①	51m	石積みは3段～5段。今の道路が出来るまで、猪垣東端からさらに東へ、小池家の果樹園の端まで猪垣があった(「①の延長」参照)。
②	15m	石積みは3段～5段、外側(山側)を削って猪垣に盛り土と石積みを施し、猪垣として最も原型をとどめている。石積みの大きな石の長さは1m。猪垣上に直径45cmの縱の切株あり。外側の堀は幅1mの平らな道状になっている。 「図-3 遠見石猪垣断面寸法図」参照。
③	13m	石積みはなし、盛り土のみ。石は持ち去られたもよう。
④	19m	まばらな石積み、一部の石は持ち去られたもよう。残りの石はかなり崩れている。 今の道路が出来るまで、猪垣東端から道路に沿ってさらに東へ、小池宅を少し越えた所まで猪垣があった。聞き伝えでは、さらに先の下沢宅まで猪垣は伸びていたという。
⑤	38m	南側15mの石積みは4段～5段でしっかりしている。「文献3」の図と同じ。ただし「山桜の巨木の切株」は見あたらない。北側に向かうにつれ、一部の石は持ち去られたもよう。残りの石は崩れて3段～1段になっている。最も大きな石の長さは1.6m。外側の山林は平ら、猪垣②のように山を削った跡はない。⑤の南端は延命不動尊裏まで。その先は、今は無いが向きを真南に変え、さらに40m続いている。現在の⑤の延長の石積みは新しいもの。
⑥	15m	石積みは4段～5段、「文献3」の図と同じ。石積みの外側の際に沢の下流へ向かう小径の跡が残っている。さらにその外は沢筋(今は水路が通る)へと傾斜している。石積みの外側は、小径の跡を含め水路まで竹林。
実延長	151m	
①の延長	69m	今は無いが、小池 博氏が子供の頃あったという石積みの推定。道路普請のため取り壊された。
④の延長	134m	今は無いが、小池 博氏が子供の頃あったという石積み(④から110m)、および小池 博氏が伝え聞いている石積み(その先14m)の推定。道路普請のため取り壊された。
⑤の延長	40m	今は無いが、豊口善弘氏が覚えているという石積みの推定。 石積みの様子は⑤の延長と考えられる。
推定延長	243m	
総延長	394m	

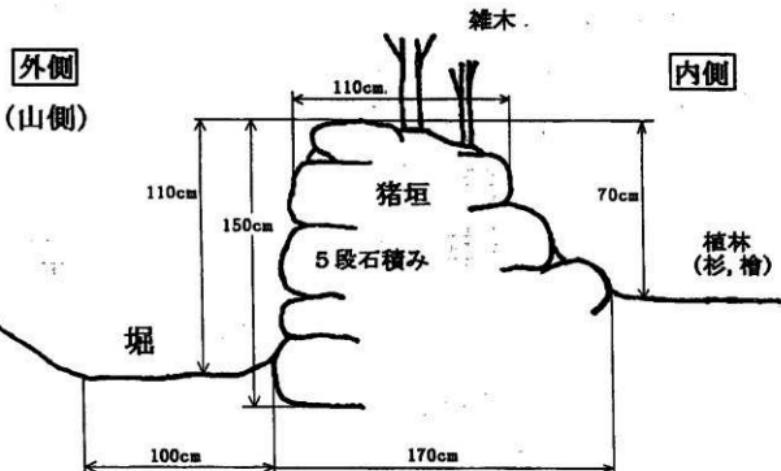


図3：造見石猪垣断面寸法図

[猪垣の木戸]

小池家と豈口家のそれぞれの所有地の間を通る道は、現在幅4メートルの舗装道路だが、当時は猪垣の堀のようになった狭い小径で、村人たちが山へ通うのに使っていた（写真2）。この小径を通って猪垣を抜けるところには、猪垣の内と外を隔てる木戸があった。村人は昼間山へ働きに行って夕方帰ってきたが、最後にこの木戸を通って中へに入る人は必ず木戸を閉めるようにした。それで、「木戸閉め」あるいは「しんがり」と呼ばれたという。

[猪の見張り小屋]

豈口家には、かつて猪の見張り小屋だったといわれる建物が残っている。今は納屋として使っていてトタン葺きの簡素な造り（写真3）だが、よくみると材は手斧けずりである。かつては茅葺きで人が寝泊まりしたという。猪垣のすぐ内側にあり（図2Ⓐ）、場所は変わっていない。秋には、この小屋で大きな音をたてたりして猪をおどしたと思われる。

[現在の獣害]

現在この付近には、猿・カモシカ・熊・猪が出るが、最近は猿による被害が甚だしい。猪垣跡のすぐそばにある果樹園の猿よけの電気牧柵は今と昔の違いを感じさせるが、変わらないのは猿に作物を荒らされる人の苦労である。

【周辺の文化財】

神社跡

豊口家の猪垣（図2⑤）の外側、北西25メートルの林の中に神社跡がある。豊口家の祝殿ともう一つの神社があった。「もう一つの神社」の名称と祭神は不明だが、豊口家や小池家を含む周辺の何軒かで氏子を構成していたという。さらに、神社の付属施設として茅葺きの舞台があった。

今回の調査では、旗竿を立てた穴付きの石を2つ（写真4）、および祝殿の基礎石を確認した。それらの配置は図4のとおりである。なお、もう一つの神社と舞台の位置は推定して示した。

現在、祝殿は猪垣（図2⑤）の内側に移されており（写真5）、もう一つの神社は明治期に芝宮神社に合祀されたという。舞台は、猪垣内側の宅地内に移され（図2⑥）、納屋として使われている。舞台には格子戸がついていたが、使用のじゃまになるため取り除かれた。かつて幟旗もあったが、布団の裏に使ってしまったという。

延命不動尊

豊口家の当代善弘氏より3代前（ひいおじいさん）は神主だった。御嶽山で修行をし、その満願記念に延命不動尊を建立した（写真5）。

水車小屋跡

猪垣（図2⑤）の延長（推定）の南端、豊口家の宅地から南西の日向沢川に向かって一段下がったところに、水車小屋の跡がある。日向沢川から引いた水を利用して、戦後まで使われた。現在は石臼が残っている。

紫芝春男氏によると、中川村南向には「バッタリ」と呼ぶ水車小屋があり、水車を利用して、臼の代わりに「バタン、バタン」と音を立て、猪を追い払ったという。豊口家で水車小屋を「バッタリ」として使ったかは不明である。

豊口家の墓

豊口家の東70メートルに豊口家の墓地がある。当代善弘氏は13代目。東奥の墓が最も古い。東手前の大きな墓石は、中川村田島から運んだという。猪垣の構築時期などの手掛かりに、この墓の調査を今後の課題としたい。

春日街道

この辺りで2筋に分かれていたといわれる春日街道の西側の道が、豊白家の猪垣（図2⑤）の西20メートルを猪垣と平行に通っていたと推定されている。小池家の猪垣（図2②）では、その堀が道筋に当たる。

南へ向かう道筋は、日向沢川の岸に出て、岸を下って現在の中河原橋付近で川を渡っていたと考えられている。当時の日向沢川は、現在よりかなり浅かったようである。

遠見石

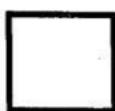
猪垣（図2②）の北西40メートルの草原に、ひとつの巨石がある。昔、日本武尊（やまとたけるのみこと）がこの地を通ったとき、この石に登って遠望したという伝説があり、

図4：神社配置図

神社(推定)



祝殿



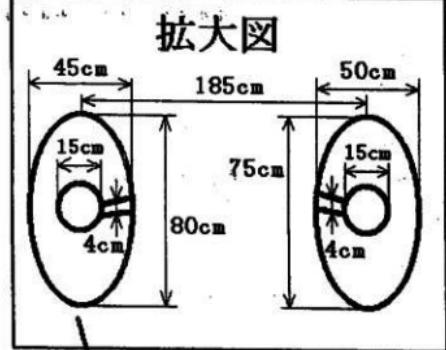
基礎石
2m四方

舞台(推定)

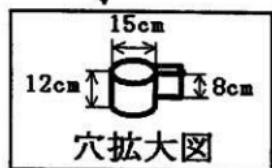


茅葺

拡大図



旗竿立て用
穴付石



名を遠見石という。字名「遠見石」はこの巨石に由来する。

豊口家ゆかりの神社跡の周辺には、この巨石ほどではないが、かなり大きな石が地面に露出している。いずれも河川で洗われたような丸みを帯びていて、その昔はこの辺りが日向沢川の河原であったことがうかがえる。

(2) 高遠原長助林の猪垣

【猪垣の位置と概観】

猪垣のある場所は、七久保区高遠原耕地のうちで字は中河原だが、通称「長助林（ちよすけばやし）」と呼ばれる。木曾山脈の麓に当たり、日向沢川の右岸の段丘上、中央道のすぐ西で、遠見石の猪垣の南南東470メートルにある。

表：土地所有者と植生／作物

年代	土地所有者 所有家(屋号:耕地:被譲渡者:当代)	土地の植生/作物	
		猪垣内側	猪垣外側
猪垣構築期	不明		煙草作物(推定) 不明
昭和初期まで	土地1: 片桐家(板屋:高遠原:不明:24代 修(故)妻菊枝) 土地2: 不明		山林
昭和24年(1949)ころまで	土地1: 片桐家(南:新屋敷:源太郎:勝美) 土地2: 竹内家(尾越:上通り:正実:松久)		山林、竹林
昭和42年(1967)まで	土地1、土地2: 山内家(なし:上通り:鐵作:妻きくゑ)	梨	山林(松)、竹林
平成9年(1997)年調査日		植林(杉、檜)	

表：猪垣の長さと様子

猪垣番号	長さ	外観
①	23m	松と竹(孟宗竹)の林の中に、外側高さ110cm、内側高さ40cm、幅1.5mの盛り土が続いている。部分的に石垣を思わせる石積みと、独立した石が盛り土に埋もれている。「図-6 長助林猪垣断面寸法図」参照。 外側は平らな面が道まで続いている。遠見石の猪垣②のように外側(山側)を削って盛り土をしていない。自然に内側が一段高くなっているところへ、溝を少し掘って盛り土をしたのであろう。今、溝は埋もれたのか、今ははない。 西の端は盛り土が突然無くなり、外側の面と同じ高さに落ちている。人為的に盛り土が削られたものと思われる。 石が少ないのは持ち去られたせいか、部分的に石積みがあるため、当初から盛り土が主であったとは考えにくい。 大きな石の長さは1m。 内側は杉の植林。
②	11m	外側に道が出来たため、猪垣として見えにくい。猪垣①から続いているが、石の大きさは猪垣①と比べて小さい。内側の地面の高さは同じであるが、下流に下るに従って道が低くなっているため、猪垣の見かけの高さは高くなっている。猪垣①と同様に、石積みが見えないところもある。 猪垣の上から内側にかけて雑木が茂っている。
実延長	34m	
②の推定延長	35m	②の先は、さらに猪垣が続いていたという。推定は中央道の側路までとする。
総延長	69m	

図5：高速原長助林猪垣地図



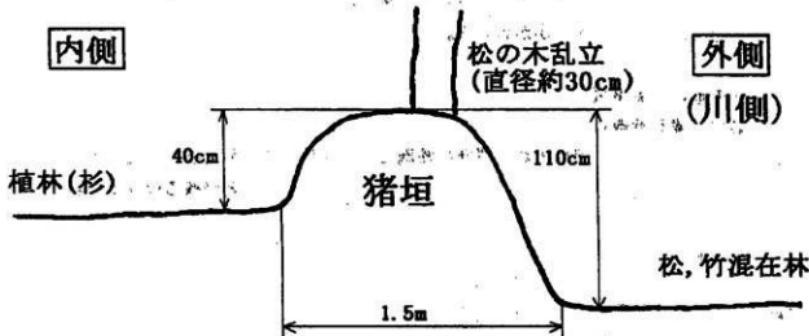


図6：長助林猪垣断面寸法図

「長助林」の由来は、昔の土地所有者片桐家（屋号：板屋、高遠原）の当主の名前をとったという。

長助林の猪垣は、石積みの形はしっかりしていないが、盛り土は明確である。現在残っているのは3.4メートルだが、かつてはもっと長く続いていたという。

日向沢の川筋を伝って出没する猪から畠を守ったと思われる。

【聞き取り調査】

この猪垣は、これまで文献に記されたことがなく、今回の調査で紫芝春男氏の案内によって確認することができた。紫芝氏は、次の2人から「長助林に猪垣がある」と聞かされていたという。

○中島洋治氏（故人）……駒ヶ根の人。昭和10年前後に十数年間七久保で教員を勤め、七久保のいたるところを調査したといわれる。

○鎌倉元太郎氏（故人）…七久保新屋敷の農家で、郷土史に興味を持った人。

長助林猪垣の土地所有者山内きくゑ氏（上通り、明治40年生れ）は、戦後夫婦でこの土地を購入し、立ち木を売って果樹園（梨）にしたが、土地の造成はしておらず猪垣には手を加えなかったという。猪垣近傍の松はそのとき伐り残したもの。今は果樹園ではなく、杉や檜が植林されている。

山内氏の前の土地所有者の一人、故竹内正実氏（屋号：尾越、上通り）の次代夫妻（松久氏、栄子氏）によると、猪垣の一帯數町歩はかつて焼畑によって蕎麦を作っていた。また、石は豊富にあり、畑のまわりに石を積み上げてあったという。猪垣に沿った道を西方におよそ120メートル進むと、道の左沿いにそれと思われる古い石垣が見受けられる。これらの構築年代や、石垣が猪よけを目的としていたかどうかはわからない。

石が豊富にあったということから、遠見石の猪垣周辺と同様に、この付近がかつて日向沢川の河原であったことがうかがわれる。

(3) その他の関係事項

【獵師鉄砲・威し鉄砲】

集芝春男氏によると、雇い入れた獵師の鉄砲による猪打ちや、お百姓の空砲による猪威しがおこなわれたという。長助林より山側の方に「鉄砲山」の地名が残るのはその名残ではないか。

「獵師鉄砲」については、巻末の「付記」を参照。

【柏木原の猪鹿よけ芝土手驅動】

安永9年(1780)、七久保村北村の百姓8人は、字柏木原に猪鹿よけ芝土手を築き、入会権を主張する7か村に飯島役所へ訴えられたが、内済で解決した(参考文献1、2、3、8を参照)。芝土手を築いたところは七座神社の東北方面といわれるが、場所の特定はできなかった。

【三峯講】

七久保村のある五人組の定書によれば、天明3年(1783)3月に講をつくって三峯山への代参がおこなわれた。祈祷をして、御札の願い上げをしたという。

2 田切区の猪堀・猪垣

田切区の猪堀・猪垣の調査は、「春日平櫛の脇班」がおこなった。

櫛の脇の猪堀は、昭和46年ごろから飯島町郷土研究会田切支部が調査を始めたことによってその存在が知られるようになり、昭和51年3月には遠見石の猪垣とともに飯島町教育委員会によって文化財標柱が立てられた。以来20年が経過し、山際にある堀なので土砂などによって堀の底が浅くなっていることが危惧されるようになった。今回の調査は、このようなことを踏まえての実施となった。

聖徳寺の猪垣については、その存在が近くの人たちによって語り継がれている。また、飯島町郷土研究会の報告があるが、あらためて現地確認をおこなった。

(1) 春日平櫛の脇の猪堀

【猪堀の位置と概要】

田切区春日平櫛の脇地籍は、田切区のうちでも西方の木曾山脈の麓に位置する。中央道の西800メートルほどのところで、北300メートルを西から東に中田切川が流れる。

櫛の脇の猪堀は、「櫛の脇3軒」と呼ばれた唐沢氏3軒が、所有の田畠を守るために耕

地の外壁に築いたものと思われる。唐沢氏3軒は、もとは田切村北河原に居住していたが、元禄年間ごろ、本村から離れて櫛の脇地籍に移り住んだと伝えられている。

この3軒は、屋号「北」（当代：昇氏）、「中」（当代：茂男氏）、「南」（当代：正治氏）で、現在は明治期に別家した屋号「西」（当代：五美氏）を加えた4軒が北から南にならんでいる。猪塀は西方の山から出てくる猪を防ぐのが目的で、宅地の東ではなく、南北に並んだ宅地の延長線上を東端として、宅地西の耕地を囲うようにつくられていた。

過去の調査では、猪塀の全体を1号塀・2号塀にわけて記録しているので、今回もそれにならない、屋号「北」と「中」の宅地の間を通る道を100メートル山側に上った地点を起点とし、そこから北へ伸びる塀を1号塀、南へ伸びる塀を2号塀とした。起点には、現在文化財標柱が立っている（写真9）。1号塀は、屋号「北」の宅地とその西の耕地を取り囲むように弧を描き、2号塀は「中」「南」「西」の宅地とその西の耕地を守るようにつくられている。1号塀は全長360メートルほど、2号塀（写真10、11）は全長280メートルほどあり、総延長は640メートルにも及ぶ。

最も原状に近い部分は、1号塀の西南部分の30～50メートルで、藪の茂る中で今でも幅3～4メートル、深さ2メートルの規模を保っている。ほかの部分はだいぶ埋まっていて、辛うじてその跡がわかる程度のところもある。2号塀では最も明確と思われる場所で、幅2メートル、深さ0.5メートルほどの塀が確認できる。

現状に近い部分だけでも、手を加えて保存していくことが望まれる。

【櫛の脇地籍の田畠】

安永9年（1780）の田切村北河原「新田検地帳」によると、このとき櫛の脇の田畠が検地を受け、年貢の対象地とされた。このとき把握された新田畠は次のとおり。

名 請 人	田・畠	面 積	名 請 人	田・畠	面 積
十右衛門	見付畠	6 歓 21 歩		見付田	1 歓 21 歩
	見付畠	9 歓 24 歩		見付田	1 歓 步
	見付畠	3 歓 3 歩		見付田	1 歓 15 歩
	見付田	27 歩		見付畠	8 歓 18 歩
新七	見付田	27 歩	善四郎	見付畠	6 歓 27 歩
	見付畠	8 歓 27 歩		見付田	2 歓 21 歩
	見付畠	2 歓 21 歩		見付田	6 歓 21 歩
	見付畠	4 歓 3 歩		合 計	見付田 1 反 5 歓 12 歩
	見付畠	7 歓 27 歩		見付畠	6 反 8 歓 21 歩

※十右衛門は「北」、新七は「中」、善四郎は「南」

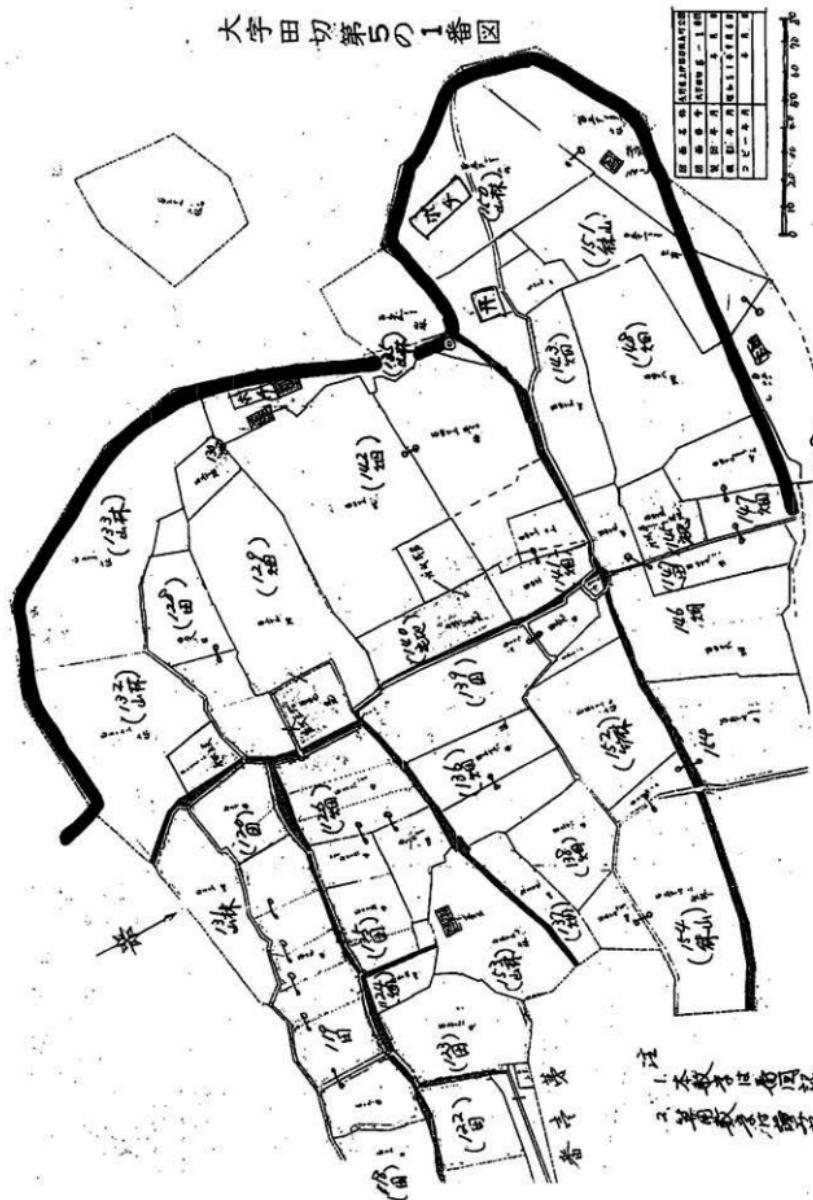
本村から離れた山棲の櫛の脇には、それまでは検地が及んでいなかったのかもしれない。「新田検地帳」に記された櫛の脇の田畠は「見付田」「見付畠」となっている。

また、明治12年（1879）改正の「地引帳」によると、櫛の脇地籍には林場を含む52筆があり（田切村113番地～154番地）、そのうち耕地は、田が11筆で1町1



田切桟之脇

大字田切第5の1番図



反4段12歩、畠が17筆で2町7反3段0.2歩、宅地（屋敷畠）が3筆で2反1段25歩となっている。

土地所有者は唐沢3家のみで、猪垣はこれらの耕地を守るためのものだったと思われる。

[猪垣周辺の文化財]

墓地

起点の北西30メートルほどのところ、1号塚の内側に「北」の墓地がある。起点から南80メートルの2号塚のすぐ内側には「中」の墓地がある。

祝殿

起点のすぐ北に、唐沢家の祝殿がある。

無縫仏と巨石

1号塚の北側外に、落ち武者を供養したと伝えられる3つの墓石がある。すぐ東に巨石があり、墓はわかりやすいようにこの巨石のそばにつくったという。そのさらに東には、祠と蚕玉神が祭ってある。

(2) 聖徳寺の猪垣

[猪垣の位置と概観]

J R飯田線田切駅のすぐ北、田切区追引に石上山太子院聖徳寺（浄土宗）がある。がつては門前30メートルほどのところを伊那街道が通っていた。

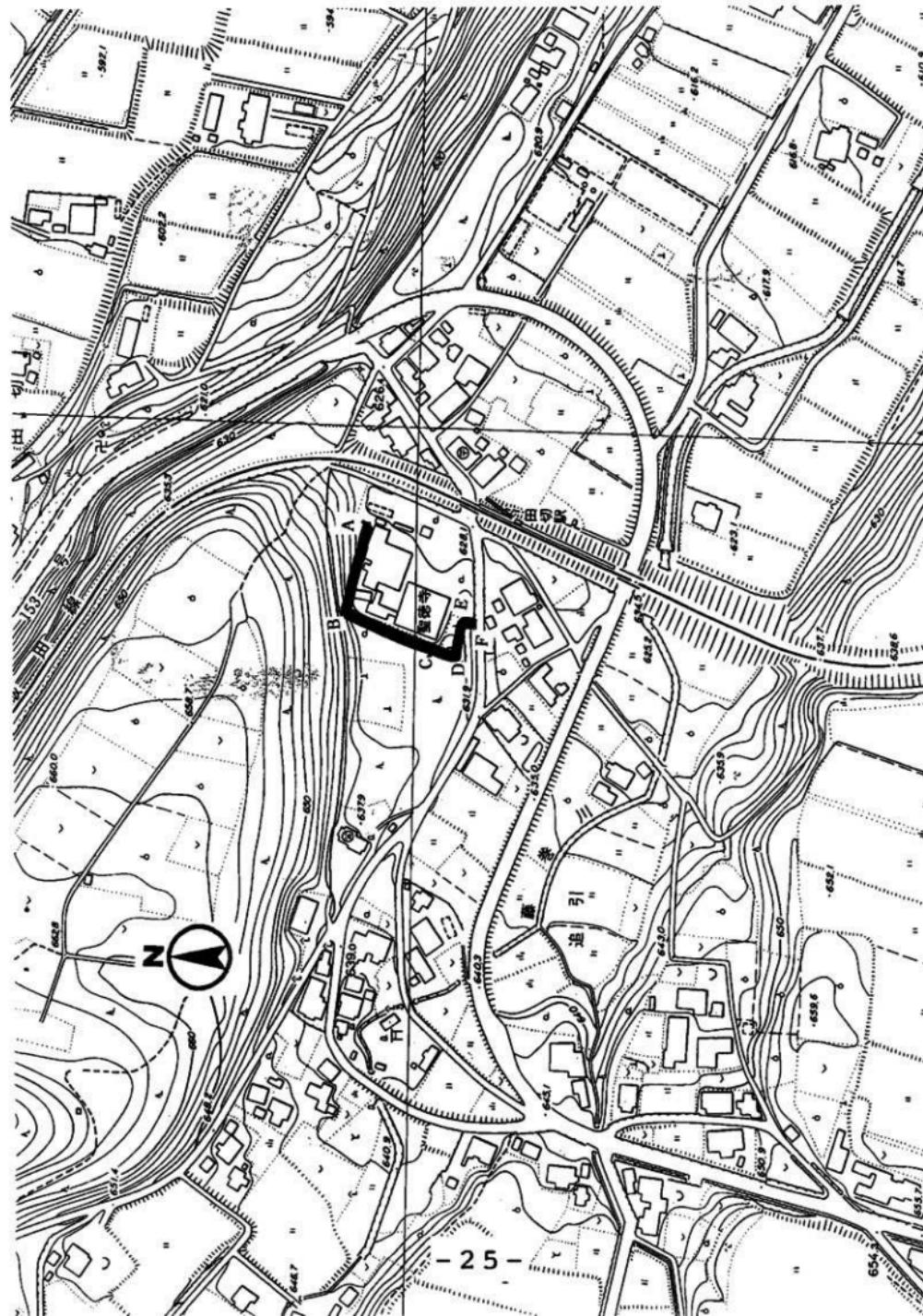
昔もこの辺りには伊那街道に沿って民家があった。だが、街道から西は原野が多く、聖徳寺の裏（北・西）も山で、ここから猪がおりてきた。聖徳寺の猪垣は、これを防ぐようになしに敷地の北と西を囲っている。

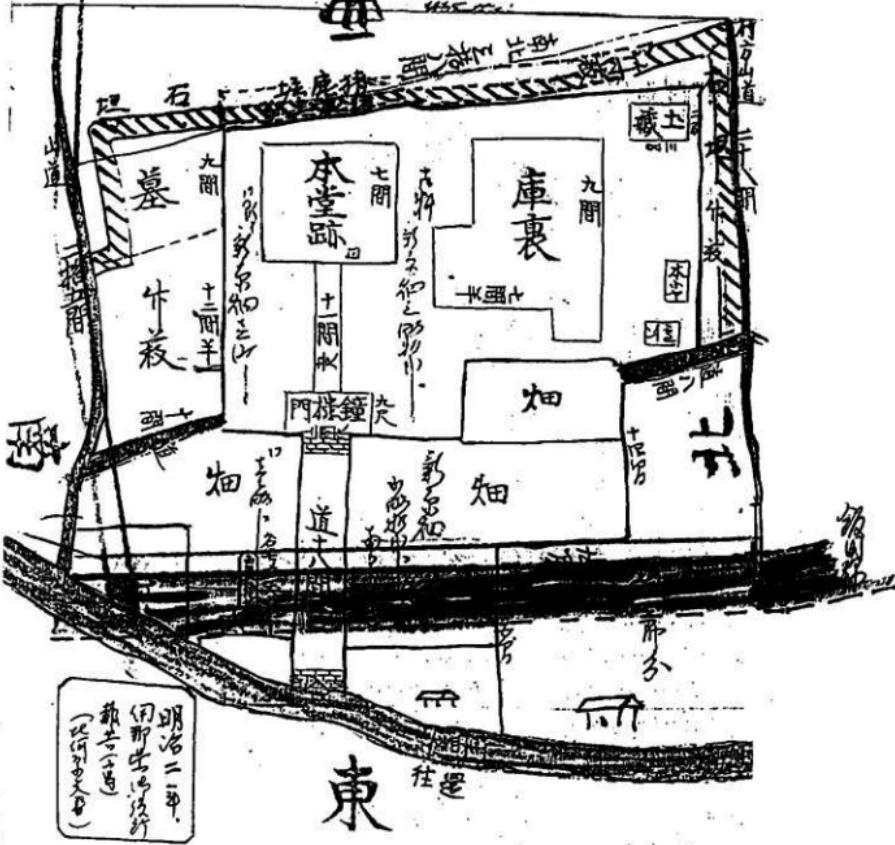
北側は石積みの猪垣が東西に52メートル続く（写真12）。基部が埋没しているが、原形を保っている。そのすぐ外側の塙に当たる部分は、昔から村人が利用する道だった。西側は北側の石垣の続きで10メートルほど石積みの猪垣が残り、その先38メートルは塙だったが現在は埋められている。さらに続きの20メートルほどは塙と石積みが原形をとどめ、そこから東に屈曲して20メートル続く。再度南に折れて5メートルほどある。

猪垣をつくった時期はわからない。飯島町に残るほかの猪垣・猪塙とは目的を異にし、農作物を守るためにではなく、境内や墓地を猪に荒らされないようにするために植家が石垣や塙をめぐらせたものと思われる。猪が出なくなつて塙はだいぶ埋められたが、石垣とその塙に当たる道は、今でも北側が山で、昔の面影を残している。

(3) その他の関係事項

田切地域には、明治初期の三峯講の文書が多く残されている。かつて日方磐神社境内に三峯大神が祭つてあったが、明治41年4月に末社の蚕玉神社に合祀し、今も末社祭として祭事をおこなつてている。





- A-B : 52m…基部が埋没、上は原形が残っている。
 B-C : 48m…10m石垣、38mは堀だったが埋没。
 C-D : 20m…原形が残っている。
 D-E : 20m…原形が残っている。
 E-F : 5m…県道改修で一部積み直しする。



3 飯島区の猪堀

飯島区では、日曾利山の田に猪堀があったということがいわれてきたが、その場所は一般には知られていなかった。今回は、「日曾利山の田班」が現地を確認し、聞き取りを中心にして山の田周辺の猪害や昔の様子について調査した。

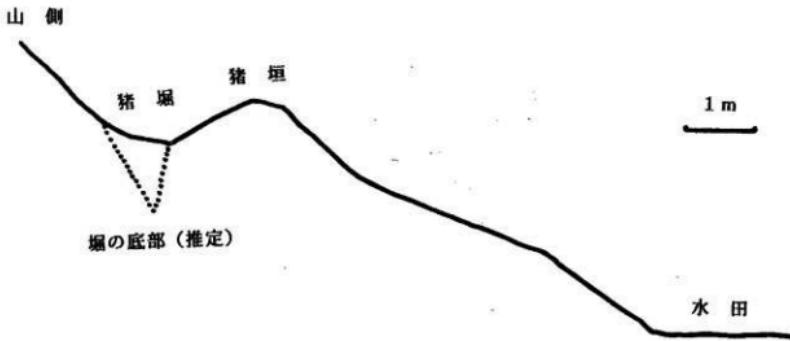
また、岩間上山の上山宗吾氏からの情報提供により、今まで知られていなかったが、この地籍に猪堀があったことが分かり、急きょ事務局で確認調査をおこなった。

(1) 日曾利山の田の猪堀

【猪堀の位置と概観】

飯島区日曾利山の田の集落は、天竜川東の日曾利地区のうちでも最も東に入った標高の高い位置にある。猪堀は山の田地籍のうちでは南にあり、南の沢に注ぐ熊沢井の左岸（南）に130メートルほど続いていた。

山の田の猪堀は、昔、熊沢井の水を引いて耕作した水田跡の南を覆っている。現在も堀の跡がうかがえる。この水田は、減反によってつくられなくなり、現在は植林地や荒れ地になっている（写真13）。「猪野」という字名があり、昔から猪がよく出たことがうかがえる。この土地を含む南の沢と熊沢井に挟まれた傾斜地一帯の田畠・山林は、その中央付近に宅地を構えた柄山家が1軒で所持していた。猪堀は、柄山家が自らの田畠を守るために築いたものと考えられる。



山の田の猪堀断面図

[猪害についての聞き取り]

以下は、山の田に住む米沢一氏（明治44年生れ）からの聞き取りである。蟹沢（山の田の集落の一番東北のお宅）の上には、マキのホタに柵を結んで猪害を防いだ。昔は全面に柵を結うか何かしにゃあ、おそらく防ぎきれなんだと思うんだけれど、どういうことだか猪が一時（明治～昭和初期）絶えておったもんで痕跡もなくなった。自分が子供のうちから終戦までは猪なんか見たこともなかったが、終戦後になってうんと出るようになった。今になってさかんに出るようになっている。最近はどうしようもないんで、猪の土手なんてもんじゃねえ、電気の柵を引いておる（写真15）。今年はまだ出てこないが、去年は今ごろ（10月上旬）毎日出てきてどうしようもなかった。みんな芋やなんか掘られちゃった。

猪は時期を知っていて、必ず収穫間際にになると出てくる。トウモロコシにしても、もう2、3日で採ろうというときにしてきて食われちゃう。若いころには、自分の大事な畑だけは、カヤで囲って穴を掘ってぬくとく（暖かく）して番をしておった。自分がおぼえているうちにはやらんけど、生まれる前、おじいさんの時代には焼烟もやっていた。焼烟で薔薇を作っとると必ず猪が出てくるもんで番をした。

正月の行事で「猪追い」をするというのは聞いたことがあるが、おはらいをしたりということはない。

むじなや狸は害が少ないと、猪は大変食欲がある。今はどうしようもなくて電牧を引いたりしておるけれど、昔の人はあらゆることをしたがなかなか猪には勝てなんだ。鹿もけっこう出てくる。去年は、鹿の角の3段のでかいやつを拾ってきた。植林したところを食って荒らされて、見たらそこに落ちとったもんで、害をしたけれど角をおいていったもんで、まあいいやってわけ…。カモシカでなくてニホンジカだ。こんなところじゃあ外敵（動物）との戦いだ。

山の犬っちゅうやつがおったというのは聞いた。馬が死んだりして、馬捨て場の山へ持っていくって捨てとけば、山犬が来て食っちまったらしいね。山の犬の話ならここどころじゃねえ、石曾根にもある（後述）。

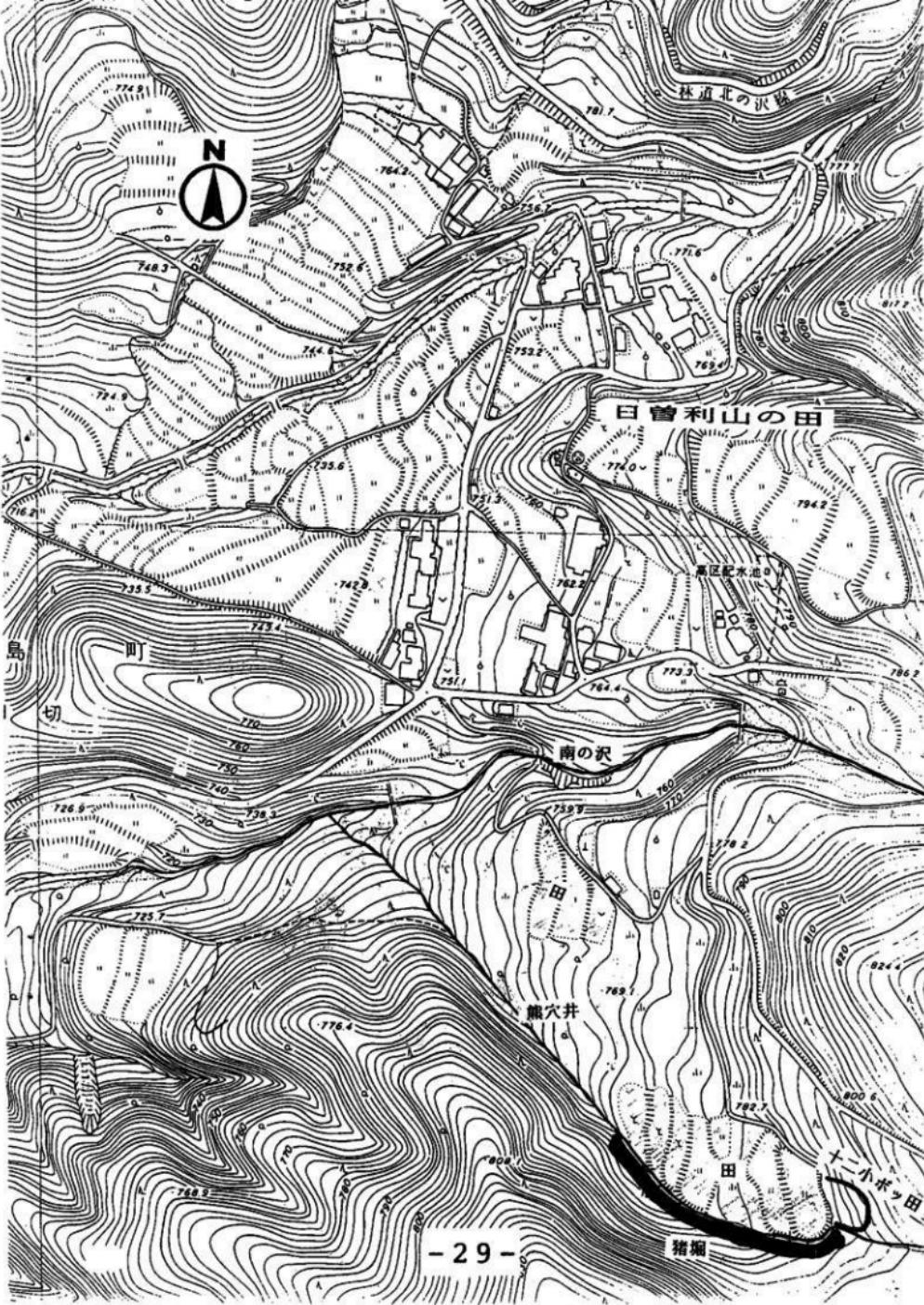
鉄砲打ちは終戦後には2、3人やった。雪が降りや、うさぎ追いに行くにセコに頼まれて、あんなに骨の折れる仕事もねえんだけれど、いくらかとれて、なんにもねえ時分もんで夜みんなで食べるのが楽しみだった。

○山犬を助けてやったら褒美をくれた話～石曾根、屋号中屋に伝わる伝説

入山へ仕事に行ったら、山犬が口を大きく開けてあおひいておった。口の中を見ると、歯にかんざしが刺さっておった。抜いてほしいちゅうことだと思って、抜いてやることにした。かみ殺されてはかなわんと思って片手に「なた」をふり上げ、片手でかんざしを抜いてやった。

そうしたら、子供が生まれたとき、キジをお礼にくわえてってくれた。

（平成9年10月25日、石曾根唐沢千明さんより採話、中島淑雄）



名利曾の字曰

- 1 沢ノ田 2 ナラブ日影
3 基 烟 4 山 田 5 沢 田 6 沢 ナラブ日影
7 猪ノ野下 8 猪ノ野下

影根釣魚佛

21

【周辺の文化財】

十二小ボッ田

柄山家の水田は、宅地の西南と、少し離れた東南にあった。猪垣は、この東南の田の南側を囲っていた。この田の上手（東）に「十二小ボッ田」（じゅうにこぼった）といわれる棚田があった（写真16）。幅が6尺くらい、広くても12尺くらいの小さな田が12枚、棚田になっていた。今は植林されているがその跡はわかる。以下は米沢翁の談。

○昔は食べ物を作るため、どこからどこまでも米か、粟を作った。ここでも大正のはじめまでは福を作ったが、養蚕をやるようになってやめた。

○昔は草を刈ってきて肥料にした（刈敷）もんで、こういう山田はグウラ（周囲）の山が草刈り場になって、今想像する以上にたいへん条件がよかったです。

木地屋の屋敷跡

十二小ボッ田の300メートルほど上に木地屋（木地師・ろくろ師）の屋敷があった。木地屋というのは、ろくろを挽いて丸膳・椀・盆などの木地をつくる人たちで、山中に小屋を建てて住み、材料となる木を伐りつくせば移動して諸国の山野を渡り歩いた。全國に散在していたが、木地屋集団の本拠は近江の山中にあって、平安時代の皇族を祖とするなどといわれ、組織されていた。

山の田から下っていった道沿いの墓地に、菊の紋章が刻まれた木地屋のお墓といわれる石塔がある。

丸尾横手

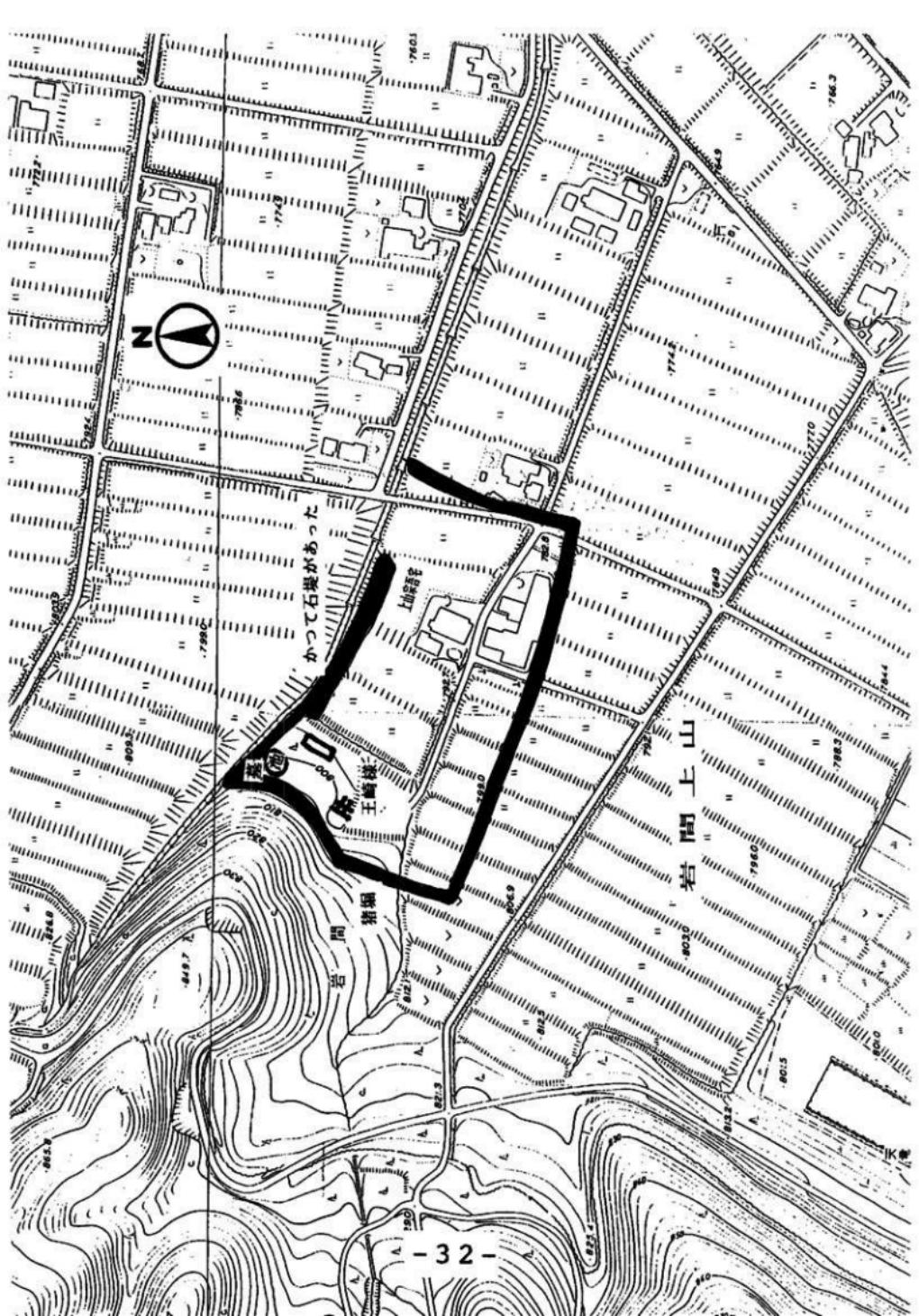
丸尾（中川村）に出る便利な道。山の田から南の中川村方面へ出るには、昔は下へおりずに丸尾横手を通っていた。北へ行くにも下へはおりず、吉瀬（駒ヶ根市）へ出る道があった。

（2）岩間上山の猪垣

【猪垣の位置と概観】

飯島区岩間上山地籍は、飯島区のうち西方の木曾山脈の麓に位置する。猪垣は、中央道飯島バス停の北西750メートルほどにある上山家（屋号：上ノ上山、当代：宗吾氏）の所有地を取り巻くようにつくられていた。現在は、西側の植林地のなかに100メートルほどと、堆肥舎の南東にわずかに堀の跡が残るだけだが、上山宗吾氏と別家の上山嘉雄氏の記憶によると、つぎのように所有地の周囲600メートル以上にわたって、堀・土手・石積みがあったという。

宅地の東側は、今の道路の東側、上山嘉雄氏宅の小屋あたりを通って100メートルほど、堀とその土を盛った土手があった。堀の部分は道になっていた。宅地の南側は現在の水田の中、堆肥舎の裏（南）を通って東西におよそ220メートル、ほぼ直線の堀があった。その西端から北へ向かっては、現在の水田から道を越え植林地へ80メートルほど堀が直進し、林の中を等高線に沿うように緩くU字を描いて本沢まで80メートルほど伸び



る。そこから東へは沢沿いに30メートルほど堀が伸び、その先は120メートルほど沢沿いに石積みの猪垣があった。東南の部分がとぎれるが、この部分は子供時分にも跡はなく、猪垣・猪堀があったかは不明という。

当代宗吾氏の母が嫁いできたころは、猪垣の外は大木の林だったという。周囲が全部山なので、猪を防ぐには、周りを全部囲う必要があったようだ。

嘉雄氏の家は、屋号を上垣外かみがきとというが、昔の重箱などには「上山垣外」と書いてある。上山の垣根の外、猪垣の外ということかもしれない。嘉雄氏宅の小屋の脇には、麻の木がある。猪垣の土手に麻を作っていたようで、今でも自然に生えてくる。

北側の本沢沿いに築かれた石積みの猪垣は、水害を防ぐ堤防の役目も兼ねていたようだ。本沢は、ふだんは小さな沢だが（それでも昔は背丈くらいはあった）、奥が深いので降ると水量がものすごい。この土手の上は道になっていた。石は、戦後、砂防林をつくるときに資材として使われてしまった。

【周辺の文化財】

王崎様

林の中に王崎様といわれる上山一族の社がある（写真19）。明治時代に石上神社に合社したが、災難が続いたので分社した。昔は、中町の上山さん（屋号：一力）なども紋付き袴で馬に乗ってやってきて、二の體付きでお祭りをやったという。

古い図面を見ると、今の祠の前が宅地になっているので、社務所があったようだ。石積みや旗竿を立てる穴付きの石も2つ残っている。

墓・池・土手

宅地から見て北西の猪垣の内側に、「南無阿弥陀仏」と刻まれた墓碑が1つある。もとはもっとたくさんある墓碑があったが、大正12年ごろの水害で埋まってしまった。どういう人たちの墓なのかわからない。

墓の東側に池のようなところがあった。今ではだいぶ埋まってしまっている。

その東には、水害避けともし避けるとも思えないがどう見ても人工的な土手がある。これも、何のためのものかわからない。

伝承

もとは上山家の南側、天竜川魚協のます池のある辺りに集落があって、そこから移って石曾根の集落ができた、という言い伝えがある。

4 町内の猪垣・猪堀の特性

今回の調査では、現在でも町内に6か所の猪垣・猪堀の跡が残っていることが確かめられた。全体を概観すると、つぎの4点が指摘できる。

①一般的な猪よけ方法としての猪垣・猪堀

町内に残る猪垣・猪堀は、天竜川の西にも東にもあり、町域の北から南までの各所に散在している。このことは、猪垣・猪堀がこの地域の山際に一般的な猪よけ方法の一つだったことを示している。

②その形はみな同じではない

ところどころで石垣だったり堀だったり土手だったり、地形その他の事情によってそこにあった方法で築いている。

③構築時期は江戸時代後期以前か？

構築時期については、いずれも古文書などの手がかりがなく、不明である。しかし、飯島町近辺では幕末から昭和初期にかけて、猪が大変少なかったといわれることから、どれも江戸時代後期にはすでに存在した可能性が高いと思われる。

④1戸または同族の数戸が自らの農地を守るために構築した

ほかと性格の異なる聖徳寺を除く5例はみな、個々の家、また同族の数軒が、各々の農地を守ろうとしてつくったものと思われる。つまり、領主が命じてつくらせたとか、村ないし地域を挙げて構築したというものではない。

⑤に関して、向山雅重氏はかつてつぎのように述べた（参考文献8）。

煙の如く山中に点在している山の畠、山の田、或いは山の寺、林の中の小さい村居等では、個人的に或いは極く小規模な共同の猪垣をもつだけであったものが、相当な戸数をもつ村落では大規模な共同経営的な猪鹿防げが行なわれ、猪垣は恒久化されて土手や石垣にて築かれたものとなり、さらに道路に木戸、流れ川に水門を設けるなどして完全な防禦的要素を備えて来たものである。

飯島町域には「大規模な共同経営的な」猪垣はなかったのだが、「相当の戸数をもつ村落」が猪の被害に頭を悩ませていたふしある。それは、江戸後期、七久保村・石曾根村・田切村が村を挙げて猪鹿打ちの獵師を雇い、そのために例えば田切村では多いときには年間の村入用の20%以上の費用を遣っていることからうかがえる（巻末の「付記」参照）。しかし、これらの村には、村全体を守るような規模の猪垣はみられない。したがって、飯島町域の村々の場合は、地形が何かの理由で、大規模な猪垣をつくるよりは獵師鉄砲に頼るほうを選んだのかもしれない。山際の家では個人的に猪垣をこしらえ、村としては村を挙げて獵師を雇って対処するというように、いろんな方法を併せて用いながら効果を上げようとしたということもあるのではないだろうか。

猪よけの方法を他地域と比較検討することが、飯島町域の村々の地域的特性をつかむ一つの手段となりうるかどうか、今後の課題としておきたい。

<付記>

古文書から見た江戸時代の獵師鉄砲

(川村正彦)

鉄砲証文と鉄砲役

宝暦4年(1754)の田切村北河原「高反別井村明細帳」には、「一、永三拾文、定納鉄砲役、一挺に付永拾文」とか、「一、猪鹿御座候」といった記述がある。昔から猪や鹿がいて、鉄砲を所持する村人がいたことがわかる。

獵師の鉄砲所持を願い出た「鉄砲証文」は、貞享2年(1685)、飯島役所では3代代官設楽太郎兵衛のときからで、鉄砲1挺に付き永10文の鉄砲役(運上)が明治3年の伊那県まで続いた。

村方文書の中から近村の鉄砲数を見ると、石曾根村9挺、七久保村は北割9挺、南割8挺、田切村3組は表1のように変動がなく、獵師鉄砲と威し鉄砲の仕分けは元治元年だけで、運上は一律に納めている。

表1: 「年貢割付」から見た田切村の

鉄砲數(単位/挺)

年代	組	南割	中平	北河原
元禄期		6		3
正徳期		6	4	3
享保期			4	3
宝暦期			4	3
明和~安永		6	4	3
文化~文政		6	4	3
天保~元治			4	(翻)2 (裏)1
明治3年		6	4	3

注1: 空欄は調査資料がなく不明のもの
(変動はないと思われる)。

2: 鉄砲役は当初は「鉄砲役」として割り付けられたが、享保年代からは
「小物成永」としてほかの運上と一緒に扱われてきた。

3: 鉄砲役は1挺永10文と定められた
が、七久保村の天保14年は、1挺
永11文7分6厘となっている。

猪鹿打ち入用割

獵師鉄砲・威し鉄砲の「鉄砲役」や火薬・火縄等の費用(入用)は、「高割」「銀割」などによって割り付けて徴収したが、各村まちまちである。

石曾根村の猪鹿打ち入用の割り付け方法は、表2のように年代によってまちまちである。寛政6年の石曾根村「獵師入用銀立帳」には、この年の獵師入用は永597文5分で、1挺に付き永8文4分1厘5毛(錢にすると、1挺に付き錢53文、半挺に付き錢27文、4半挺に付き錢13文)で、71挺の割り付けをしている。

七久保村の猪鹿打ち入用割り付けでは、「高割」「銀割」が表3のようになっている。

表2：石曾根村の猪鹿打ち入用

年次	割り付け方法			備考
宝曆5(1755)	高掛り	織掛り		銀1挺永20文、銀数82挺
明和1(1764)	"	"	入作高掛り	
安永5(1776)	"	"	"	銀数62挺
天明4(1784)	"	"	"	銀数75挺
寛政6(1794)	"	"		銀数71挺
寛政12(1800)	"	"	"	銀数87.5挺
文化1(1804)	"		両村屋賃	石曾根村・飯島町屋賃
文政1(1818)	"		"	
天保4(1833)	"		"	
弘化1(1844)	"		"	
安政1(1854)	"		"	
慶応2(1866)	"		"	
明治3(1870)	"		"	
明治8(1875)	"	戸数割	人頭割	地主100戸に付き銀7俵592、1戸戸3俵、1人戸5俵5毛

表3：猪鹿打ち入用の割賦(七久保村南割・北割)

年号	高割(1074石3斗9升3合)		銀割			
	北割	南割	北割	南割	北割	南割
弘化3 1846	貢文 4.923	貢文 2.517	社 220	貢文 92	貢文 92	貢文 2.600
安政1 1854	銀 9.142	銀 4.721	219		86	
3 1856	銀 8.594	銀 4.439	218		92	
4 1857	9.326	4.816	①		①	
5 1858	10.800	5.570	228	7.836	90	3.090
文久1 1861	7.478	3.860	218	7.925	94	3.417
3 1863	7.945	4.104	227	8.492	95	3.553
慶応2 1866	9.872	5.100	240	6.825	111	3.155
明治1 1868	21.634	11.170	229	15.901	86	5.969
2 1869	21.295	10.995	②	15.663	②	5.863

註 ①は南割・北割にて計316挺

(向山雅重『伊那農村誌』より)

②は南割・北割にて計323挺

表4：田切村南割、猪鹿打ち入用

年 代	猪鹿入用		村入用	
	猪鹿入用(永)	%	村入用合(永)	高1石 掛り永
明和元 1764	500文	12.6	3貫962.0	8.65
4 1767	500文	10.6	4貫705.69	10.27
安永元 1772	812文	17.2	4貫711.14	10.71
2 1773	712文	13.6	5貫201.1	11.337
3 1774	632文	12.4	5貫100.0	11.62
4 1775	712文	13.5	5貫260.4	11.468
5 1776	612文	11.4	5貫364.74	11.697
7 1778	612文	6.2	9貫766.54	21.292
8 1779	1貫012文	12.9	7貫844.8	16.018
天明元 1781	1貫481文	22.3	6貫643.6	14.139
2 1782	1貫481文	22.3	6貫634.6	14.139
3 1783	1貫443文	19.3	7貫465.0	15.91
4 1784	1貫472文	20.5	7貫167.7	15.275

(向山雅重『伊那農村誌』より。右段の「村入用」に占める
「猪鹿入用」が左段に示されている。)

「銀割」の銀1挺の定めは、自作・小作に関係なく各人の耕作面積によって算出したのではないかという説もあるが、「銀を持って働ける成人1人=銀1挺」と考えたほうが無理がないように思われる。表3の七久保村の弘化3年(1846)の銀数は、北割が220挺で南割が92挺となっているが、宗門人別帳で見ると、この年代にはほど近い文化文政期の成人数は、北割が222人、南割が90人である。

田切村南割の猪鹿打ち入用は、表4のように「高割」で、村入用の1割から2割を占めている。

田切村北河原の鉄砲証文

元治2年(慶應元年=1865)に田切村北河原から市田役所に差し出した鉄砲証文を参考資料として挙げておく。

一、總席場面幕面十金搭萬防事
以人數內備館多歸名市邊
若備作事深，總席事多為名公作
深事舉以是可。

一、總文告戴小旗袍（年青者所持
者多之）參禮者以新魏之
總總相調度，並在白金上
所持所領上所至知彼處，並在公席前
之上新魏形狀相調，其高有身
作後，當舉手仰頭，右足伸直，左
足屈而前，右肩上者，其身也
右足上身，左足下身，次第三往，可使

一、總文三書或七種地外，村內之持持
者，其人常無便。若以新魏二
旗袍相調度，節由庄屋送相處，其上
而後所送，按上而下，次第三往，可使
于甲上而下新魏二旗袍相調，甲間數張，
仰頭，正舉手奉上，後仰身，右脚微直，左脚
裹足，身直，若右肩上者，其身也。
右足上身，左足下身，次第三往，可使
於甲上而下庄屋送相處，其上而下
仰頭，正舉手奉上，後仰身，右脚微直，左脚
裹足，身直，若右肩上者，其身也。

元祐丙午年

新魏
平正昂（晴田）
長頭（三石）
腰（川村）
腰（吉田）
腰（少田）
腰（平田）

元祐丙午月

新魏
平正昂
組合
子兵衛
腰（吉田）
腰（川村）
腰（吉田）
腰（平田）

市田
御役所

庄屋
組頭
庄屋
平四郎
作

高田（御部張寺住處）
所役所

卷之三
一
自古有之，聖賢傳誥，詳備於前，如
右至帝世，相用皆得施，方系于外，雖具
義理，所拾拾否，遂以障塞為名，在人據
名以絕道上，以考尋，猶相師在小君
之節，則流俗之傳施，仍拘於舊立人稱
肉之說，也而之也，但以是皆非之，

引領義之有ノ假共、而銳炮發、固左翼節迄相用、恨後炮王率異外語、取捨所持仕人早達、陣屋へ罷出で之有、始末の證進申上、而後是圖、請相勦仕す。候若申の御旨、該炮所持仕人等立人數の内之引以手水候ハ、如何解、御益を仰体、此恨後日、爲證文、是上申處仍て件ノ如レ

元治癸丑二月	文秀
新七	西
卷之三	中
年	下
卷之四	上
年	卷之五
卷之六	卷之六
年	卷之七
卷之八	卷之八
年	卷之九
卷之十	卷之十
年	卷之十一
卷之十二	卷之十二
年	卷之十三
卷之十四	卷之十四
年	卷之十五
卷之十六	卷之十六
年	卷之十七
卷之十八	卷之十八
年	卷之十九
卷之二十	卷之二十
年	卷之二十一
卷之二十二	卷之二十二
年	卷之二十三
卷之二十四	卷之二十四
年	卷之二十五
卷之二十六	卷之二十六
年	卷之二十七
卷之二十八	卷之二十八
年	卷之二十九
卷之三十	卷之三十
年	卷之三十一
卷之三十二	卷之三十二
年	卷之三十三
卷之三十四	卷之三十四
年	卷之三十五
卷之三十六	卷之三十六
年	卷之三十七
卷之三十八	卷之三十八
年	卷之三十九
卷之四十	卷之四十
年	卷之四十一
卷之四十二	卷之四十二
年	卷之四十三
卷之四十四	卷之四十四
年	卷之四十五
卷之四十六	卷之四十六
年	卷之四十七
卷之四十八	卷之四十八
年	卷之四十九
卷之五十	卷之五十
年	卷之五十一
卷之五十二	卷之五十二
年	卷之五十三
卷之五十四	卷之五十四
年	卷之五十五
卷之五十六	卷之五十六
年	卷之五十七
卷之五十八	卷之五十八
年	卷之五十九
卷之六十	卷之六十
年	卷之六十一
卷之六十二	卷之六十二
年	卷之六十三
卷之六十四	卷之六十四
年	卷之六十五
卷之六十六	卷之六十六
年	卷之六十七
卷之六十八	卷之六十八
年	卷之六十九
卷之七十	卷之七十
年	卷之七十一
卷之七十二	卷之七十二
年	卷之七十三
卷之七十四	卷之七十四
年	卷之七十五
卷之七十六	卷之七十六
年	卷之七十七
卷之七十八	卷之七十八
年	卷之七十九
卷之八十	卷之八十
年	卷之八十一
卷之八十二	卷之八十二
年	卷之八十三
卷之八十四	卷之八十四
年	卷之八十五
卷之八十六	卷之八十六
年	卷之八十七
卷之八十八	卷之八十八
年	卷之八十九
卷之九十	卷之九十
年	卷之九十一
卷之九十二	卷之九十二
年	卷之九十三
卷之九十四	卷之九十四
年	卷之九十五
卷之九十六	卷之九十六
年	卷之九十七
卷之九十八	卷之九十八
年	卷之九十九
卷之一百	卷之一百
年	卷之一百一
卷之一百二	卷之一百二
年	卷之一百三
卷之一百四	卷之一百四
年	卷之一百五
卷之一百六	卷之一百六
年	卷之一百七
卷之一百八	卷之一百八
年	卷之一百九
卷之一百十	卷之一百十
年	卷之一百一十一
卷之一百二十二	卷之一百二十二
年	卷之一百三十三
卷之一百四十四	卷之一百四十四
年	卷之一百五十五
卷之一百五十六	卷之一百五十六
年	卷之一百六十七
卷之一百五十八	卷之一百五十八
年	卷之一百六十九
卷之一百五十九	卷之一百五十九
年	卷之一百七十一
卷之一百六十一	卷之一百六十一
年	卷之一百七十三
卷之一百六十二	卷之一百六十二
年	卷之一百七十五
卷之一百六十三	卷之一百六十三
年	卷之一百七十七
卷之一百六十四	卷之一百六十四
年	卷之一百七十九
卷之一百六十五	卷之一百六十五
年	卷之一百八十一
卷之一百六十七	卷之一百六十七
年	卷之一百八十三
卷之一百六十八	卷之一百六十八
年	卷之一百八十五
卷之一百六十九	卷之一百六十九
年	卷之一百八十七
卷之一百七十	卷之一百七十
年	卷之一百八十九
卷之一百八十一	卷之一百八十一
年	卷之一百九十一
卷之一百八十二	卷之一百八十二
年	卷之一百九十三
卷之一百八十三	卷之一百八十三
年	卷之一百九十五
卷之一百八十四	卷之一百八十四
年	卷之一百九十七
卷之一百八十五	卷之一百八十五
年	卷之一百九十九
卷之一百八十六	卷之一百八十六
年	卷之二百

李公輔書和絃絕句二首兩道
李公輔書和絃絕句二首兩道
化人筆墨上龍子集卷之三
詩僧杜子春公孫席防草書集之三
杜子春公孫集之三

右は額上奉候後御机前下さる書面を過
て御候候。右は仰多喜御成候也。右様は
他人は神上に及ばず親子兄弟ニシテ。一切
御借仕聞教候。猶慮防まざる事。御事
仕立。仰蒙此景遇奉り候事。

獵砲證文御改版

獵師鉄炮證文

三月

田中村

北河原

二月

田中村

北河原

獵作鐵砲證文

獵師鉄炮證文

一、獵師鉄炮

壹挺 但玉目或文八分
此役 永九文六分

桂 明治廿四年

威

右付 獵師鉄炮

前刀通り相獵り奉り使拂り候處

寛正三脚座年間

然ル上座頭と獵業事務寄せ

思事仕り間教く拂法度の鷹白馬壁ノ打掛

敷候たとへ親子兄弟にて共、錢也奉主

之外一切賃借古有及又柄を拂候此式

て拂業事相成る子細之有り候て申詎

申上奉り當初是圖ヲ拂付候様仕事申候

筋迄ど之有り。近村賃坐立追々私方り者

も常現余儀無く體立人數内之列込

居卡城多倫多經走人於南半引

<参考文献>

飯島町の猪垣・猪垣に関係する文献

- 1 : 「飯島町誌」中巻（中世・近世編）, 1996.2
- 2 : 「上伊那誌資料2 七久保」, 1956.11
- 3 : 松村弥次兵衛『駒鹿漫筆』, 1983.3
- 4 : 「文化財標柱台帳」（飯島町教育委員会）

伊那谷の猪垣・猪垣・猪よけに関する文献

- 5 : 「長野県上伊那誌」民俗編上, 1980,
- 6 : 「長野県史」民俗編第2巻(2) 南信地方「仕事と行事」, 1988.2
- 7 : 「長野県史」通史編第5巻近世2, 1988.3
- 8 : 向山雅重『伊那農村誌』, 1984.11, 廉友社
- 9 : 松村義也『山裾筆記』, 1991.7, 信教出版
- 10 : 松山義雄『山国の神と人』, 1961.11, 未来社
- 11 : 野溝利雄「諏訪形の猪垣考」, 1993.1

全国の猪よけに関する文献

- 12 : 野本寛一『焼烟民俗文化論』, 1984.5 雄山閣

猪と人の営みに関する文献

- 13 : 大林太良編『日本の古代第10巻 山人の生業』, 1987.6, 中央公論社
- 14 : 金子浩昌・小西正泰・佐々木清光・千葉徳爾『日本史の中の動物事典』, 1992.5, 東京堂出版

